

<実践報告>

「内発的な体験活動」に基づいた総合的な学習の実践  
 -4年一貫したヤクシカの飼育体験の事例研究-

酒井直彦 辰野町立辰野東小学校  
 土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

A Practice of the Integrated Study Based on “Intrinsic Experiential Activities”  
 - A Case Study of a Raising Yakushika Deer -

SAKAI Naohiko: Tatsuno Higashi Elementary School, Tatsuno Town,  
 DOI Susumu: Educational Science, Faculty of Education, Shinshu University

研究の目的	第1は、児童が4年間にわたって統一のテーマ「メリーとげんきっこ」に取り組むことにより、どのような成長を遂げたかを事例研究として明らかにすることである。第2は、はい回る体験学習にならないための総合的な学習の時間の教師の指導の在り方について考察することである。
キーワード	内発的な体験学習 ヤクシカの飼育体験 4年一貫した総合的な学習
実践の目的	総合的な学習を統一のテーマで4年間にもわたって積み上げていくには、その実践の根底に児童の「内発的な体験活動」が位置付けられていることが不可欠であることを実証的に明らかにする。
実践者名	酒井直彦
対象者	伊那市立高遠北小学校3学年～6学年
実践期間	2001年5月27日～2005年3月24日
実践研究の方法と経過	2001年5月27日の朝、日曜参観日にH児が登校途中に、交通事故で弱っているタヌキを拾ってきた。2002年7月4日にヤクシカの小屋「メリーHOUSE」が完成した。同年9月18日に待ちに待たれてメリーが学校にやってきた。2004年8月7日～9日に念願の屋久島体験学習旅行が実現した。2005年3月23日、24日にメリーはNPO法人「伊那ハーレンバレー パカパカ塾」に引き取られ、引っ越し作業が完了した。
実践から得られた知見・提言	学習者自らが活動への願いを持ち、友だちと関わり合いながら展開する「内発的な体験活動」においては、学習者が意欲的に活動に取り組み、達成感や実感を味わっている。総合的な学習が従来の学力観の立場から批判を受けていることには問題がある。筆者は「内発的な体験活動」に基づいた総合的な学習を実践することが重要であると考えます。

## 1. 本稿の目的

筆者はこれまで5校に勤務してきたが、学級の中核活動や総合的な学習において教師主導の学習題材で進めたときは失敗し、児童生徒の「内発的な体験活動」を展開することができたときは子どもの学びが成功するという経験をしてきた。本実践は4校目の高遠町立高遠北小学校（現在は伊那市立高遠北小学校）において、総合的な学習の時間に「内発的な体験活動」に基づいて実践したものである。

この第一の目的は、日台利夫（2005）が「総合的な学習では長期間のデータスパンでの実証的な研究が必要である」<sup>(1)</sup>と述べているように、子どもたちが4年間にわたって統一のテーマ「メリーとげんきっこ」<sup>(2)</sup>に取り組むことによってどのような成長を遂げたかを事例研究として実証的に明らかにすることである。

第二の目的は、はい回る体験学習にならないための総合的な学習の時間の教師の指導の在り方について考察することである。

筆者は、子どもが必要感に迫られ、強い課題意識を持って、子ども自らが取り組む体験活動こそ「生きる力」につながると考える。そして、子どもが自らの体験活動を通して新たに気づいた課題を、自ら解決するために、自ら選択し、自己決定していく活動こそはい回る体験という批判を打ち破るものであると考え、このような体験を「内発的な体験活動」と呼ぶことにした。

## 2. 4年間にわたる総合的な学習「メリーとげんきっこ」の成立背景

2001年（平成13年）5月27日の朝、日曜参観日のことであった。H児が登校途中に交通事故で弱っているタヌキを拾ってきた。足や尾に傷があったためH児はそのタヌキを保健室へ連れて行き、養護教諭に手当をしてもらっていた。このことを聞いた子どもたちと筆者はそのタヌキを見ようと一目散に保健室にいった。子どもたちは交通事故にあったにもかかわらずこうして手当を受けている幸運なタヌキということで「ラッキー」と名付けた。「ラッキーが元気になるまでみんなで世話をしたい。元気になったらお山に返してあげよう」ということになり、早速小屋づくりが始まった。

3年生になったばかりの子どもたちには金槌やのこぎりはうまく使えない。それでも率先して釘を打つ子、筆者の釘打ちの補助をする子、ラッキーが寝られるようにと家から藁を持って来る子と、自分たちにできることを考え、気を働かせて動く学級の子どもたちの姿から、筆者は願いに向かって行動できるときに、子どもの主体性が発揮されると実感することができた。

この出来事を聞きつけた長野県野生傷病鳥獣保護ボランティアのT氏が来校され、クラスで飼うことを承認してくださった。しかし、看病のかいなくラッキーは1週間でなくなり、子どもたちは「お山に返そう」と裏山にお墓をつくった。子どもたちはこの現実をしっかりと受け止めていたので、命について考えさせる授業を行った。ラッキーとの出会いは全く偶然ではあったが、この出会いがげんきっこたちに実り多い体験をもたらし、心の

成長をうながしてくれた。

数週間後、長野県野生傷病鳥獣保護ボランティアのT氏より、ご自身で飼育されているヤクシカをクラスで世話をしてみてもどうか、という提案をいただいた。子どもたちがその気になったらいつでも連絡を下さいとのことであった。筆者は迷った。このことを子どもたちに話せば、すぐにとびつくに決まっている。しかし、命のある大型の生物を飼育することは、容易でないことが理解できた。さらに、飼育活動が子どもたちに与える教育的意味が不明確では飼育に踏み切れないことも理解できた。ただ、学級の実態から飼育活動を通して、命の大切さや動物愛護の気持ちが育ち、友への思いやりの心や根気強さと責任感が育成されていけば大いに意味があると思った。そして、T氏に再度以下のことを確認した。

#### ①ヤクシカの特徴 ②ヤクシカの飼育方法 ③飼育の条件

その結果、力を出し合い協力しあえば飼育は可能だと判断し、子どもたちの気持ちを確認するために、飼育をするかどうかの話し合いをした。「世話をしたい」という子が多いなか、「世話をしたくない」という子が5人いた。筆者は全員の気持ちが一つにならないうちは飼育をすることはできないことを告げた。

しばらく日にちが経過して、M児の提案で「一度そのヤクシカを見に行ってみよう」ということになり、T氏のお宅まで見に行った。1学期終了が明日に迫った7月26日であった。えさを与えたり、小屋に入って近くに行ったり大喜びの子どもたちであった。子どもたちは、T氏にヤクシカのことや飼育の仕方について聞き取り調査を行った。そして、その場で「メリー」と命名した。雌のヤクシカである。教室に戻ってから、飼育することは大変なことだという認識を新たにした子どもたちであったが、「世話をしよう」という意見で学級全体がまとまった。世話をしたくないと感じていた子どもたちも、当初の気持ちは残っているものの、みんなと活動することの良さを感じ取ったように筆者には思われた。

T氏の提案により、本校でのヤクシカの小屋に最も適した場所は中庭であるということに決まった。しかし、校舎の耐震工事が始まり小屋作りの作業ができなくなかった。子どもたちは、すぐにでもメリーを迎えたいという気持ちを抑え、耐震工事が終わるまで待つことを決めた。しかし、工事が終了したのは12月、しかも冬季を迎え積雪のために活動を更に先に伸ばさなければならなかった。

この間に筆者はT氏から小屋の設計についての聞き取りを行い、子どもたちの願いに対応できる準備作業を開始した。また、ヤクシカについてインターネットサイトで調査するとともに、

田中光常(1968)『日本野生動物記』朝日新聞社

岡田要(1965)『新日本動物図鑑』北隆館

伊沢紘生・相谷俊雄・川道武男(1996)『日本動物大百科』平凡社

などの書物で教材としてのヤクシカについての理解を深めた。

### 3. 第3学年における飼育活動と「内発的な体験活動」の内実

#### 3.1 第3学年（2001年度，平成13年度）における飼育活動

3年生においてはT氏のお宅でヤクシカに触れ，子どもたちがみんなで飼おうと心を一つにしたことを見届けて，筆者はこの生きた教材をとおして子どもたちの可能性を十分に引き出し，子どもが自らの体験活動を通して新たに気づいた課題を，自ら解決するために，自ら選択し，自己決定していく「内発的な体験活動」を実現していきたいと願った。

#### 3.2 第3学年における「内発的な体験活動」の内実

- ①野生傷病動物の飼育体験：H児のタヌキ（ラッキー）との出会いと1週間の飼育活動。
- ②小屋づくり：ラッキーの小屋を初めてのこぎりや金槌を使って作り上げた。
- ③外部講師に学ぶ体験：長野県野生傷病鳥獣保護ボランティアであるT氏との出会い。T氏からヤクシカについて学ぶことは，初めて外部講師から教わる授業となった。
- ④ヤクシカとの出会い：T氏のお宅で飼われているヤクシカとの出会いによる喜び。子どもたちはその場で直ぐにメリーと命名した。
- ⑤感動体験：立つことができなかつたラッキーが立った。水を飲んだ，あげた餌を食べた等，子どもたちの働きかけに応えるラッキーの姿に喜びを感じ，生き甲斐を感じている。
- ⑥失敗挫折体験：ラッキーの突然の死に直面する体験。ヤクシカの飼育に胸を躍らせていた子どもたちであったが，耐震工事と雪のために8ヶ月以上もの期間を待たなければならなかつた。

### 4. 第4学年における飼育活動と「内発的な体験活動」の内実

#### 4.1 第4学年（2002年度，平成14年度）における飼育活動

年度をまたぎ8ヶ月以上待った子どもたちは，はやくメリーを連れて来たくて仕方がなかつた。T氏に手紙を書いてメリーの健在ぶりを確かめた。4年生になると早速メリーの家づくりに向かつての活動が始まった。小枝を用いて「メリーHOUSE」の文字をかたどった看板が掲げられ，小屋が完成したのは7月4日のことであつた。

子どもたちは活動の願いを学習カードに次のように書いている。

- いっぱい餌をやって長生きさせたい。メリーを育てて鹿のことを知りたい。
- メリーのことをいろいろ知りたい。さわれるくらい仲良くなりたい。メリーと学んでいきたい。

どの子どもたちの文章にも，いよいよメリーの飼育ができることへの期待と喜びがあふれていた。この時点で筆者は，メリーとの学習が単なる子鹿の飼育活動に終わることなく，この学習を通して子鹿の生態や自然環境に関わる調査活動，さらには，地道に続けることが命題とされるだけに，飼育活動にともなつての命の尊厳の学習や動物愛護の学習，友だちとの協力にかかわる心の学習，小屋づくりといった体験的な活動に踏み込んだ学習ができることを見通すことができた。

2002年（平成14年）9月18日に待ちに待たれてメリーが学校にやつて来た。子どもた

ちのメリーに寄せる温かい思いに包まれて、総合的な学習「メリーとげんきっこ」の学習も本格的に開始されることになった。

#### 4.2 第4学年における「内発的な体験活動」の内実

- ①小屋づくり体験：大型野生動物であるヤクシカを飼育するための小屋は、約20 m<sup>2</sup>の面積で高さ5メートルを必要とした。子どもたちの意識は「家」である。そんなに大きな「家」を4ヶ月間かけて作り上げている。
- ②生木（丸太）切り体験：小屋にはメリーが体をこすりつける（においづけ行動の習性）立ち木が必要であることを調べた子どもたちは、のこぎりを使用して3人で3日ばかりで切り倒すことができた。さらに、小屋に設置するための枝払いや適当な長さに切る加工も体験した。
- ③角材を切る体験：のこぎりを使用して三寸角の角材を切り口が垂直になるように切る体験をしている。
- ④板を切る体験：暑さ3 cmの板を何枚も、のこぎりを使用して切る体験をしている。また、ベニア板を切る体験もしている。
- ⑤釘を打つ体験：金槌を使用して厚さ3 cmの板を2寸釘で打ち付ける体験をしている。また、使用する板の厚さによって釘の種類を使い分けている。一寸釘、二寸釘、三寸釘、五寸釘、傘釘。
- ⑥棚をつくる体験：餌置き場に二段の棚をつくっている。板の長さを揃えて切り、重いものをのせても壊れないための工夫をしている。
- ⑦餌箱をつくる体験：板材を使用して餌箱をつくる体験をしている。
- ⑧動物を移動させる体験：メリーを学校まで移動させるために麻酔注射を打った。麻酔が効いている状態から麻酔から覚醒する状態のメリーの姿を直に自分たちの目で見ている。
- ⑨ヤクシカの飼育体験：野生動物の習性を確かめながら、夏から秋、冬にわたり、一日も欠かすことなく一人ひとりがメリーに寄り添った飼育体験をしている。
- ⑩鎌で草を刈る体験：メリーの好物であるアカツメクサ、大芝、笹などの青草類を鎌を使って刈っている。
- ⑪飼育小屋の掃除体験：ヤクシカの糞や尿の片づけや食べ残しの後始末等、清潔を気遣った掃除を行っている。
- ⑫一輪車で物を運ぶ体験：餌の運搬や糞尿の始末のため、重いものや軽いものを一輪車で運ぶ体験をしている。
- ⑬感動体験：自分たちのメリーへの働きかけにメリーが応えてくれたり、メリーに関しての新しい発見をするたびごとに喜びを感じている。
- ⑭失敗挫折体験：鍵のかけ忘れという自分たちの過ちのために、メリーが小屋から脱走してしまい、泣きながらメリーを探し求め、自分たちで力をあわせて元に戻すことができたという失敗体験をしている。

## 5. 第5学年における飼育活動と「内発的な体験活動」の内実

### 5.1 第5学年（2003年度、平成15年度）における飼育活動

2002年（平成14年）9月18日にメリーが学校に来てから約半年間、メリーに心を寄せて当番活動をしてきた子どもたちは、無事に寒い冬を元気に過ごすことのできたメリーの存在をうれしく思っていた。また、冬を乗り越えるための世話の仕方に心配しながら活動できた自分たちに自信をもつことができた。メリーが思う存分食べられる青草が生え始める4月がやってきたのだ。

5年生の総合的な学習のテーマは昨年に引き続き「メリーとげんきっこ」となった。このテーマでどんなことを課題として取り組みたいかを話し合ったが、一つにまとまらなかった。そこで各自の知りたいと思うことを課題として追究することになった。もちろん、飼育の世話は全員で関わった。子どもたちが掲げた課題は次の通りであった。

「メリーの特徴」

「メリーの好きな草と野菜」

「屋久島のことを調べる」

「メリーの一日の日記をつける」

「メリーについて調べる」

「メリーの様子を観察してわかったことなどをノートに記録する」

これらの課題についてわかったことを冊子づくりや模造紙に書くなどの方法でまとめた。また、2月に行われた学校内の発表会と3月の保護者参観日には、発表原稿を作成してパソコンの発表用ソフトを用いて発表した。

保護者参観日での出来事であった。メリーのふるさとである屋久島について調べた児童から「屋久島に行って実際に自分の目で確かめてみたい」という新たな願いが出された。保護者からも「みんなで頑張って活動してきている。「行けたらいいね」「発表されたような自然を見てみたいね」という感想が述べられた。授業を参観されていた学校長は、「みんながそう思うのなら行って確かめてくるのもよい学習になる」と話された。この発言を受けて学級内は大はしゃぎになり、叶うとも叶わないともわからないままではあったが、漠然とした夢となり話は盛り上がった。

筆者はこの時、自分たち自身の願いを出発点としてその願いを実現するために、これまでいくつもの課題を協力しながら解決してきた「げんきっこ」たちにとっては、屋久島行きという「内発的な体験活動」も不可能なことではないと強く感じた。

### 5.2 第5学年における「内発的な体験活動」の内実

- ①4年生での経験が生きた飼育体験：1年間を通してヤクシカを飼育した経験を生かし、深まった思いの上に立って更なる工夫をしながら飼育体験を積み重ねている。飼育小屋の掃除の工夫、餌となる青草の生える場所や時季を知ったうえで飼育活動を体験している。
- ②コンピュータでの学習体験：課題追究のためにコンピュータでの検索の仕方を学習し、調べたい事柄を検索する体験をしている。発表用ソフトを使用して発表したり、まとめ

たりする体験をしている。

## 6. 第6学年における飼育活動と「内発的な体験活動」の内実

### 6.1 第6学年（2004年度，平成16年度）における飼育活動

子どもたちは最高学年になり，総合的な学習の時間についても有終の美を飾ろうと意欲的であった。今年のテーマも「メリーとげんきっこー完結編一」となった。昨年度末に持ち上がった屋久島行きに関して，「本当に行く気持ちがあるのか，果たして実現可能なのか」について話し合いを通して課題を探った。話し合いをしていく中から，次のような解決しなければならぬ課題がたくさんあることがわかってきた。

「本当に行っていいのか」

「屋久島に何をしに行くのか」

「費用はいくらかかるのか」

「屋久島に行くためには何をすればいいのか」等。

筆者はこの時，突発的な発想や行楽的な気持ちだけで考えて欲しくないと思った。今までの活動のなかから自然に出てきた願いであることを認めつつも，主体的に取り組んでほしいと願いながら子どもたちの動きを見守った。教師主導によって進めるのではなく，学級の全員がその思いを出し合ってこそ「内発的な体験学習」の成果が大きく引き出されると考えたからである。

話し合いを通して屋久島行きを真剣に考え始めた子どもたちは，「家族の承諾を得ることから始めよう」と，屋久島にどんな目的で行くのかという目的意識を一人ひとりが持つことが大事であると考え，それぞれが家族と話し合った。保護者はこれまでの間，小屋の屋根づくり，わらの手配，土曜日，休日の当番の送迎，冬季の餌の心配等，児童と一緒にメリーに関わってきて下さった。この保護者からも屋久島行きに賛成の意向が発せられるようになってきた。旅行に関わる様々な課題のうち最も大きかったのは旅行費用であった。

子どもたちは7万円の旅費を全額親に負担してもらうわけにはいかない。自分たちの活動なのだから自分たちで費用の一部分でも賄おうと話し合った。

「費用をどうするか」の課題解決に向けて子どもたちが決めた解決方法はフリーマーケットを開くことであった。多くの人に買ってもらい利益をあげたいと願った子どもたちは，多くのお客が集まる高遠町の城下祭り（7月24日）と高遠町，長谷村共催で行われる「三峯川サマーピクニック」（7月25日）とよばれるイベントに，フリーマーケットを開くことを希望した。店舗設置場所の確保は学級PTA会長が働きかけてくれた。両日は高遠町以外の人たちが多くあつまるので，高遠の自然をテーマにした手作りのものを売りたいと願った。その結果，次のものを販売することになった。

「カエデの幼木苗」

「ホオズキの苗」

「伐採自然木を利用したマグネット」

「画鋸」

「木工品」

こうして念願の屋久島体験学習の旅行は、2004年(平成16年)8月7日(土)～9日(月)に実現した。

総合学習発表会では、子どもたちは4年間にわたるメリーとの出来事を劇にして発表したいと願った。子どもたちは「メリー物語」という台本を作り、国語の時間に表現の練習をした。この劇は保護者参観日においても見ていただいた。

自分たちの卒業への心構えや準備が進んでいくなか、メリーの卒業も併せて考え始めていく子どもたちであった。話し合いを重ねていき意見がまとまってきた。「どこか飼ってくれる学年を探す」というような安易な意見は出なかった。「メリーのことを一番に考えてくれる、メリーにとって環境の良い場所」であった。このような条件を満たす施設が、箕輪町のNPO法人「伊那ハーレンバレー パカパカ塾」であった。卒業式後の休日に当たる3月23日、24日の2日間でメリーの引っ越しが行われた。都合のつく保護者も駆けつけて下さった。子どもたちに別れを惜しむ姿はあまり感じられなかった。それは、子どもたちがメリーにとってパカパカ塾が一番幸せな環境だと感じていたからである。

筆者はトラックに乗せられていたメリーを抱いて新居へ運び入れた。4年前に出会った当時は、警戒心が強く触れることさえできなかったのに、今や子猫を抱き寄せるがごとくいとも容易に抱き上げることができた。筆者もメリーに対する情を感じずにはいられなかった。

## 6.2 第6学年における「内発的な体験活動」の内実

- ①自然体験：校地内に自生しているカエデ、オミナエシ、ホタルブクロ、ホオズキの苗の存在を知り自然の植物の苗取りや水やりなどの栽培活動を体験している。
- ②伐採体験：町有林の杉の木の伐採、登校坂の林の伐採を体験している。
- ③販売体験：屋久島行きの資金を作り出すために、カエデの幼木、オミナエシ、ホタルブクロ、ホオズキ、インパチェンス、サルビア、マリーゴールド、アゲラタムの苗、自然木を利用したマグネット、画鋸、木工品をフリーマーケットで販売する体験をした。
- ④伝承文化体験：高遠の城下祭りで子ども騎馬行列を体験した。
- ⑤旅行体験：メリーのふるさとである鹿児島県屋久島への2泊3日の学習旅行を体験している。
- ⑥創作劇体験：4年間の「メリーとげんきっこ」の総合的学習を創作劇「メリー物語」として台本を作り発表した。
- ⑦別れの体験：自分の分身のように心を通わせてきたメリーと、卒業のために別れなければならぬ辛さを体験した。
- ⑧交流体験：フリーマーケットで地域の方々や来て下さったお客さんとの人と人の交流を体験した。
- ⑨感動体験：フリーマーケットが開けたことに対して自信と喜びの感動を体験している。



屋久島行きという願いが実現したことに感動するとともに、屋久島の自然を実際に肌で直に感じる体験をしている。

## 7. 「内発的な体験活動」についての考察

学習者にとって意欲的に展開される学習には、共通して学習者自らが欲した体験活動が存在する。教師が用意した活動は、子どもは一応活動するものの、学習者の中から課題を追究していく活動にはなり難い。即ち、大きな失敗はないものの「内発的な体験活動」にはなり難い。

学習者自らが活動への願いをもち、友だちと関わり合いながら展開する「内発的な体験活動」においては、学習者が意欲的に活動に取り組み、達成感や充実感を味わっている。

斎藤喜博は「良い授業とは、教師、子ども、教材の相互作用により構成されるものであり、子どものもつ可能性を最大限に引き出し、拡大していくものだ」<sup>(3)</sup>と述べている。

筆者は4年間という長期間にわたる総合的な学習の実践をとおして、「内発的な体験活動」でなければとても持続することはできなかつたと痛感する。と同時に子どもたちは「内発的な体験活動」を通して、広い視野を持つようになり、他人の意見をお互いによく聞き合うようになった。みんなで話し合いながら納得して活動ができることは大きな喜びとなるのである。

総合的な学習として実践した「メリーとげんきっこ」は、一貫して「内発的な体験活動」となるように支援した。その結果、子どもたちが自らの学びを拓き、学びの道筋を立てながら4年間の長期にわたって学習を展開することとなった。この展開過程において、子どもたちが多くの生活場面において生きて働く力を身につけてきていることを感得することができた。

総合的な学習「メリーとげんきっこ」において、子どもたちが様々な体験を通して学んだことが、自己を高め、より良い生活を創り出していく「生きる力」の基盤となり得たかを検証するために、体験活動の内実を究明した。その結果、飼育活動から派生する数多くの体験活動が子どもたちの必要感から生じてきていることがわかり、「内発的な体験活動」の有用性が検証されたと言えよう。

体験学習の重要性について、児島邦宏(1999)は体験の回復を図っていくためには、「共通の子どもの体験を土台として考え、判断し、行動し、自己責任をもつという『価値選択』『実践力・行動力』をはぐくむことが求められる」<sup>(3)</sup>と述べている。また、土井進(2005)は、「子どもたちが夢中になって、五感で土とふれあい、生き物とふれあい、田んぼやその周りの風景を感じ取ることで、豊かな感性が培われるものと考えられる。こうして得た体験は人間の命に刻まれ生涯にわたって生きて働く体験力になる」<sup>(4)</sup>と述べている。

このように人間形成にとって極めて重要な体験的活動と基礎的学習の両面が、子どもの学校生活の中で統合されていくことがはい回る体験学習にならない道である。筆者は本実践において、子どもに必要な基礎的学習と体験的学習を、子どもの学びの側に立ってどの

ように構築していけばよいかを常に念頭において子どもたちと関わってきた。

## 8. 研究成果と今後の課題

各学年における「内発的な体験活動」の内実を分析することによって、学習過程と子どもの意識及び教師の支援の在り方が見えてきたように思われる。このことは今後の授業実践における分析視角を与えてくれるものであり、大きな研究成果となった。4年間にわたる総合的な学習「メリーげんきっこ」によって、子どもたちが屋久島への体験旅行を実現させるまでに至ったことは、子どもたちの大きな成長として評価することができよう。

現代の社会は人間関係や生活環境が大きく変化しており、子どもたちに自ら考え、自ら課題を解決することができる力を学校教育の中で育てていくことが極めて重要である。この力を養成することをめざして発足した総合的な学習が、従来の学力観の立場から批判を受けていることには問題がある。筆者は「内発的な体験活動」による総合的な学習の実践を通して、子どもの力を最大限に引き出していきたいと念願している。

ヤクシカのメリーと4年間にわたって関わることができたのは、児童の熱意だけではなく、児童の学びを支えてくれた保護者の理解が大きかった。高遠には江戸時代の藩学校進徳館が保存されている。明治教育の開拓者の指導者であった伊沢修二(1851～1917)はこの藩校の優等生であり、「学即得」を信条として学びと体験の統合をめざす教育を実践した。このような歴史的背景もあって、高遠町や保護者などの地域社会から温かい支援を受けることができた。篤く感謝したいと思う。

(注1) 日台利夫 日本生活科・総合的学習教育学会第4回シンポジウム「今、大切なこと—生活科・総合的な学習の時間での学び—」における筆者の聞き取りメモによる。立教大学池袋キャンパス, 2005年11月23日

(注2) メリーとはヤクシカの名前であり、げんきっこは高遠北小学校の児童に対する愛称である。

(注3) 児島邦宏, 1999, 『豊かな体験でいきいき教育』ぎょうせい, 2-8頁, 47-49頁, 80-84頁

(注4) 土井進, 2005, 「体験力を育てる農業学習—『信大茂菅ふるさと農場』における実践—」『教育展望』教育調査研究所, 7・8月号, 29～30頁

## 文献

大村はま, 1996, 『新編 教えるということ』筑摩書房

稲垣忠彦, 2000, 「総合学習の歴史」『総合学習を創る』岩波書店

高遠町立高遠北小学校, 2002, 2003, 『研究紀要』

土井進, 2007, 「剥離しない学力と体験力」『信州大学の地域貢献活動』, 茅野敏英編著『考える力を高める体験学習』玉川大学出版部

(2008年6月30日 受付)